

地域包括ケアを支える医療と福祉人材の養成に関する一研究（その1）

一 共修授業に係る自由記述の年度別による比較分析をふまえて一

○ 長崎純心大学人文学部 奥村 あすか (8773)

潮谷 有二 (長崎純心大学人文学部・2675), 永田 康浩 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科地域包括ケア教育センター・9050), 吉田 麻衣 (長崎純心大学人文学部・8774), 宮野 澄男 (同大学人文学部客員教授・8744)

キーワード: 多職種連携教育, 福祉人材養成, 地域包括ケア

1. 研究目的

平成26年6月の「地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律」(医療介護総合確保推進法)の公布以降, 医療と介護を一体的に供給する地域包括ケアの構築が喫緊の課題となっており, 医療と介護の連携に資する様々な体制整備が図られてきている。また, 地域包括ケア研究会報告書(三菱UFJリサーチ&コンサルティング, 2017)では, 数々の大学が多職種連携教育(以下, IPEという。)を導入している背景を踏まえて, 専門職教育課程におけるIPEの必要性を指摘している。このような状況の中, 長崎大学医学部と長崎純心大学(以下, 本学という。)は, 地域包括ケアシステムを想定し, 構造化された教育目標, 教育内容, 教育教材等によって構成される医療と福祉に係る大規模な多職種連携教育(IPE)の共修授業を, 両大学の体系的なカリキュラムの一つとして位置づけ, 平成27年度から毎年度にわたって実施してきた(潮谷ら, 2017)。

確かに, これまでの共修授業に係る成果については, 奥村ら(2017, 2018), 潮谷ら(2017), 永田ら(2017), 吉田ら(2018)が関係学会や論文等にて報告してきたが, その内容については数量的に分析を行ったものであり, 様々な主観や文脈を捉えることができる質的データに関する分析はされていない状況にある。円滑な医療と福祉の連携を促進する方法論として, 両大学の共修授業を社会的に発信していく観点から, 本研究では, 受講した学生のテキストデータをテキストマイニングによる分析を行うことにより, 共修授業についてどの様に捉えたのかを探索的に明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

調査期間は, 平成27年11月4日と11月11日, 平成28年10月26日と11月2日, 平成29年10月25日と11月1日であり, 各年の共修授業1回目及び2回目終了後に質問紙を用いた自計式の調査を実施した。調査対象者は, 平成27年度, 平成28年度, 平成29年度の共修授業(以下, H27, H28, H29という。)に受講した長崎大学医学部医学科生(H27: 124人, H28: 120人, H29: 123人), 同大学医学部保健学科生(H27: 110人, H28: 112人, H29: 114人), 本学初履修者(H27: 36人, H28: 37人, H29: 26人), 本学履修済み(H28: 14人, H29: 20人)とした。なお, 本学初履修者の学科について, H27及びH28は全員, 現代福祉学科生であり, H29は, 比較文化学科生1人, 人間心理学科生1人, それ以外は地域包括支援学科生(旧称・現代福祉学科)で構成されていることを付記しておく。分析方法は, 「本日の授業の感想を記入しましょう」という問いへの回答であるテキストデータ(1回目: n=266(H27), n=279(H28), n=276(H29), 2回目: n=265(H27), n=270(H28), n=272(H29))を対象に樋口(2014)が開発したKHCoder 2.00fを用いてテキストマイニングを行い, 共修授業の結果について年度別による比較分析を行った。具体的な手続きとしては, 最初に, テキストデータに使用されている語句の修正や段落の妥当性について検討するためのテキストデータのクリーニングを行った。次に, 形態素解析を行い, 基本統計量の算出とともに, 抽出語リストや頻出150語に関する表の作成, KWIC(Keyword in

context) コンコーダンス分析及びコロケーション統計による分析, 媒介中心性による共起ネットワーク分析を行い, 複合語(タグ)と分析対象となる品詞を選定した. 再度, 記述統計量の算出及び頻出150語に関する分析, 共起ネットワーク分析, 年度(H27, H28, H29)の外部変数を用いた対応分析を行うことで, 抽出語相互の関連性について検討した.

3. 倫理的配慮

本研究における倫理的配慮としては, 回答は本授業の教育効果の評価及び今後の授業作成のために使用するとともに, 記載内容が成績に影響することはないこと, さらに, 回答の可否によって不利益が生じないことを事前に説明した. また, データクリーニングの際には, 個人が特定されることができないように必要に応じて, 自由記述の文章にマスキングを行った. なお, 本研究については, 長崎大学医歯薬学総合研究科倫理委員会の承認を得ていること, 日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守し, 個人情報の取り扱いに注意を払っていることを付記しておく.

4. 研究結果(紙幅の都合上, 一部についてのみ掲載)

同義語処理と強制抽出を行った自由記述の形態素解析の結果, 総抽出語数は152,012語, 異なり語数は3,251語, 分析対象となっている語(使用)は2,216語, 抽出語の出現回数の平均は21.68回, 標準偏差は100.11, 集計単位は文単位で6,663文, 段落単位で1,628段落であった. また, 頻度の多い順に上位150語の抽出語リストを作成し, 「出来る」が2,254回, 「思う」が1,558回, 「意見」が1,165回であり, これらの語が長崎大学医学部及び本学との共修授業に関する自由記述において多く使用されていることが明らかになった. さらに, 抽出語の共起ネットワークを用いた分析の結果, 媒介中心性が高い抽出語は「他」, 「学科」であり, 共起関係をみると「他(学科)の意見を聞くことが出来る」, 「多(他)職種連携」等を視認することができた.

共修授業の年度別による比較分析を行うために, 外部変数(H27とH28とH29)を用いた対応分析を行った結果, H27では「難しい」「治療」「中心」「work」等の語を用いていること, また, H28では「充実」「活発」「事前」「大学」「連携」「授業」等であり, さらに, H29では「エコ」「マップ」「介入」「違い」「現場」等の語を用いているのではないかということをも明らかにすることができた.

5. 考察

本研究の結果から, 「他(学科)の意見を聞くことが出来る」「多(他)職種連携」という抽出語の共起関係が見られ, 学生たちは共修授業を受講することにより, 多職種連携ということは何らかの形で意識化したり, 言語化したりしているのではないかと推察することができた. また, 共修授業の年度別による比較分析の結果から, 各年度によって抽出語に違いが見られることを観察することができた. さらに, 今後の共修授業の在り方の示唆を得る観点から, 共起関係が観察された抽出語を中心に意味の解釈を行っていくことで, 具体的な実態を把握することに加えて, 潮谷ら(2017)によって報告されている共修授業の評価得点とテキストデータとの関連性について, 更なる検討を行っていく必要があるということを指摘しておきたい.

※本報告における詳細な結果については当日配布予定である.

※本研究は, 文部科学省の「平成25年度 未来医療研究人材養成拠点形成事業【テーマB】リサーチマインドを持った総合診療医の養成」に係る研究成果の一部である.